

曾根崎心中(徳兵衛おはつ)道行

この世の名残夜も名残
死にに行く身を警ふれば
あだしが原の道の霜
一足づつに消えて行く
夢の夢こそあはれなれ

あれ数ふれば 暁の
七つの時が 六つ鳴りて
残る一つが 今生の
鐘の響きの 聞き納め
寂滅為楽と 響くなり
鐘ばかりかは 草も木も
空も名残と 見上ぐれば
雲心なき 水の音
北斗は冴えて 影映る
星の妹背の 天の川
梅田の橋を 鵲の
橋と契りて いつまでも
われとそなたは 夫婦星
必ず添ふと 縋り寄り
二人が中に 降る涙
川の水嵩も 増さるべし

向ふの二階は 何屋とも
おぼつかなき け 最中にて
まだ寝ぬ火影 声高く
今年的心中 よしあしの
言の葉草や 茂るらん
聞くに心も くれはどり
あやなや昨日 今日までも
余所に言ひしが 明日よりは
われも噂の 数に入り
世に歌はれん 歌はば歌へ

歌ふを聞けば

どうで女房にや持ちやさんすま
い。いらぬものじやと思へども……

足取り重たげに歩く二人づれ。その姿はこの世に残す未練の現れか。けれども夜は更けて、二人に残された時は少ない。死出の道を歩む二人の姿を喩えるなら、それは化野の道にかかる夜の露、一足歩めばもう消えている。まるで夢の中で見ている夢のよう、はかなくも哀れな姿だった。

どこからか聞こえてくる鐘の音。数えてみると、夜明けをつげる七つの鐘、その六つ目が鳴り終えたばかり。されば残る一つはこの世で聞く最後の鐘ということか、迷いも消えてさぞや穏やかに聞こえよう。鐘ばかりではあるまい。目に留まる草も木も、空のありさまさえもこの世の見納めなのだ。しかし見上げてみると、夜の雲も静かな水音も、二人の思いなど知らぬげにいつもと変わらない。川面に映る北斗の光は荒涼としていて、あたかも天の川に妹背の契りを約しているように見える。もしこれが天の川だというのなら、目の前の梅田橋は銀河にかかる鵲の橋といったところだろう。この世での命が尽きたとしても、二人は夫婦の星となっていついつまでも夜空に輝くはず、来世はきっと寄り添うことができるはず、そう言って互いに寄り添っているのである。二人の間でこぼれる涙によって、川の水かさも高くなることだろう。

向こうに見えるのは何という宿か知らないが、二階では逢瀬を楽しんでいるらしい。灯りをともして今年的心中事件を品定め、賑やかにあだのこうだの言い合っているのだろう。そんな声は聞くだけで心も重くなる、といっても、意味も分からずに、昨日今日までは心中なんて他人事だと言っていたのも私たち。明日になると、そんな私たちが噂の種になって、はやり歌になるのでしょうか。そう、歌うのならどうぞ歌ってくださいな。

聞こえるは「心中江戸三界」の歌、
(歌詞) どうせアンタは私を妻にする気なんかないんでしょ、私もアンタのことなんかどうでもいいと思っていたんだけど……

げに思へども 嘆けども
身も世も思ふ ままならず
いつを今日とて 今日が日まで
心の伸びし 夜半もなく
思はぬ色に 苦しみに

どうしたことの縁じややら。忘る
隙はないはいな。それに振り捨て
て行かふとは。やりやませぬぞ。
手にかけて殺してをいて行かんせ
な。放ちはやらじと泣きければ ……

歌も多きに あの歌を
時こそあれ 今宵しも
歌ふは誰そや 聞くはわれ
過ぎにし人も われわれも
一つ思ひと 縫り付き
声も惜しまず 泣きみたり

いつはさもあれ この夜半は
せめてしばしは 長からで
心も夏の夜の習ひ
命を追はゆる 鳥の声
明けなば憂しや 天神の
森で死なんと 手を引きて
梅田堤の 小夜鳥
明日はわが身を 餌食ぞや

誠に今年は今 今年も
廿五歳の厄の年
わしも十九の厄年とて
思ひ合ふたる 厄崇り
縁の深さの 印かや
神や仏に 掛け置きし
現世の願を 今ここで
未来へ回向し 後の世も
なをしも一つ 蓮ぞやと

爪繰る数珠の 百八に
涙の玉の数添ひて
尽きせぬ哀れ 尽きる道

心も空も 影暗く
風しんしんたる 曾根崎の
森にぞ辿り 着きにける

歌にあるとおりに、いくら願っても嘆いても、世の中は思うにまかせぬことばかり。思いが満たされるはいつのことかと今日の今日まで過ごしてきたけれど、心が安まる夜もなく、加えて貴方が忘れられずに苦しむことになるなんて。

(「心中江戸三界」の続き) どうした縁があったやら、アンタが忘れられなくなったよう。それでも私を捨ててゆくというのなら、もう離しはしません。嫌ならアンタのその手で私を殺していってくやしゃんせ。離すまいぞと泣きつくと……

歌は他にもあろうに、よりによってその歌を、今日のこの夜に歌うなんて、どちら様が計らいか。無邪気に歌われるその歌を聞いているのは、これから死のうとしている私たち。歌になった恋人たちも、私たちと同じ気持ちなのだろうと、互いに縫りついて声も惜しまず泣いている。

いつもならさせておき、今夜だけは少しでも長く続いて欲しいと思っているのに、夏の夜が短いのは当たり前。二人の心もせわしくなり、追い立てるような鶏の声も聞こえる。夜が明けると、つらくても天神の森で死のうと梅田堤を歩み行く。ここかしこにたむろする鳥どもは、朝にはこの身を餌とするのだろう。

今年も徳様も 25 歳で厄の年。私も 19 で厄年を迎えました。そんな二人が惹かれあったのは厄の祟りなののでしょうか、それとも深い縁の証なののでしょうか。あちこちに掛けてきた現世でのお祈りを、いまここで来世のご利益に廻しましょう。ぜひ徳様と同じ世に生まれ変われるようにしてくださいませ。

お初が廻す数珠の玉には涙の玉が加わっている。尽きぬ哀れがあっても、まさに尽きようとする二人の命であった。

ほの暗い空の下、暗澹たる思いで歩き続けて二人はついにやってきた。風も突き刺すようなその場所が天神の森である。

かしこにか　ここにかと
はらへど草に　散る露の
我より先に　まづ消えて
定めなき世は　稲妻か
それかあらぬか……

アア怖は。今のは何といふもの
やらん

ヲヲあれこそは人魂よ。今宵死
するは我のみとこそ思ひしに、先立
つ人も有りしよな。誰にもせよ、
死出の山の伴ひぞや。南無阿弥
陀仏。南無阿弥陀仏の聲の中
あはれ悲しや又こそ魂の世を
去りしは南無阿弥陀仏と言ひけ

れば
女は愚に　涙ぐみ

今宵は人の死ぬる夜かや
あきましきよと涙ぐむ

男涙を　はらはらと流し……

二つ連れ飛ぶ人魂を余所の上と
思ふかや。まさしう御身と我が
魂よ
何なふ二人の魂とや。はや我々
は死したる身か
ヲヲ常ならば結び止め繋ぎ止め
んと嘆かまし。今は最期を急ぐ
身の魂のありかを一つに住まん。
道を迷ふな違ふなと

抱き寄せ　肌を寄せ
かっぱと伏して　泣きあたる
二人の心ぞ　不便なる

涙の糸の　結び松
棕櫚の一本の　相生を
連理の契りに　準へ
露の憂身の　置き所
サアここに　極めんと
上着の帯を　徳兵衛も
はつも涙の　染小袖
脱いでかけたる　棕櫚の葉の
その玉簪　今ぞげに
浮世の塵を　払ふらん

どこで死のうかと草を払ってみるも、飛
び散る夜露が我らより先に消えてゆく。
無常の世の中はまさしく夜露か稲妻か。
と思ったその時、人魂が二人の傍らを飛
びすぎる。

(お初)ああ、怖い、今のは何なの

(徳兵衛)あれが人魂よ、今夜死ぬのは我ら
だけと思っていたが、先立つ人がいたらしい。
どなたか存ぜぬが死出の山をともに行
くことになるのだろう。南無阿弥陀仏、南
無阿弥陀仏……

そう言って徳兵衛が念仏を唱えていると、
もう一人魂が飛ぶ。

(徳兵衛)おお悲しいかな。また一人旅立っ
たのか、南無阿弥陀仏。

女は愚かしくも涙ぐんで、

(お初)今夜は人が死ぬる夜なのでしょう
か？　なんて不吉な夜なのでしょう

と涙を流す。男もまた涙して言う。

(徳兵衛)二つ連れ添って飛んだ人魂を他人
のものとお思いなのか、あれはまさしく
我らが魂よ。

(お初)ええそんな、じゃあ私たちはもう
死んでいるのですか？

(徳兵衛)普通なら身体から抜け出してゆく
魂をつなぎ止めようと嘆きましょう。でも
今は最期の時を急ぐ身。どこへ飛ぼうと、
二人で魂の在処を一つにしておこう。道に
迷うなよ、踏み違えるなよ。

そう言うやいなや、徳兵衛はお初を抱き
寄せて肌をあわせる。そうしてがばっと
伏せて泣きあっている二人の心は、不憫
でならない。

流した涙が描く糸を結ぶことができるの
なら、二人はきっと結び松にするだろう。
いまは境内にある相生の棕櫚を連理の枝
に見立てて、そこに永久の契りを誓うば
かりである。そして露のごとく儂い身を
この場所で終えようと決めたのだった。

「さあ、ここで死のうか」そう言って
徳兵衛が上着の帯を解いて枝に掛ける
と、お初も染小袖を棕櫚の上に掛ける。
美しい簪にも似た棕櫚の葉は、さながら
浮世の塵を払うためのもののようにも見
える。

はつが袖より 剃刀出だし

もしも道にて追手のかかり、割れ割れになるとても、浮名は捨てじと心がけ。剃刀用意いたせしが、望みの通り一所で死ぬるこの嬉しさと言ひければヲヲ神妙頼もしし。さほどに心落ち着くからは最期も案ずることとはなし。さりながら今は時の苦患にて、死姿見苦しけれんも口惜しし。この二本の連理の木に体をきつと結び付け深う死ぬまいか。世に類なき死にやうの手本とならん
いかにもと

あさましや 浅黄染め
かかれとてやは 抱へ帯
両方へ引き張りて
剃刀取って さらさらと

帯は裂けても主様とわしが間はよも裂けじと

どうぞ座を組み 二重三重
緩るがぬやうに しっかりと締め

よふ締まったか
ヲヲ締めましたと

女は夫の姿を見
男は女の体を見て
こは情なき身の果てぞやと
わっと泣き入る ばかりなり

アア嘆かじと 徳兵衛
顔振り上げて 手を合はせ

我幼少にて誠の父母に離れ、叔父といひ親方の苦勞となりて人となり、恩も送らずこのままに、亡き跡までもとやかくと御難儀かけん勿体なや、罪を許して下されかし。冥途にまします父母には、追っ付け御目にかかるべし。迎へ給へと言ひければ

おはつも同じく 手を合はせ

こな様は羨まじや。冥途の親御に逢はんとある。われらが父様

その時、お初は袖から剃刀を取り出した。

(お初) 追っ手がかかった末に引き離され、徳様だけを死なせて私が生き残るなど、そんな恥ずかしい評判が立たないように剃刀も持ってまいりました。でも望みが叶って同じ場所で死ぬるとは、なんと嬉しいことでしょう。

(徳兵衛) おお、それは頼もしい心がけ。そこまで冷静でいるのなら、最期の瞬間も案ずることはあるまい。しかし今際の苦しきからのたうち回って見苦しい死に姿をさらすのも口惜しい。この相生の棕櫚に身体を強く結びつけ、ふたり抱き合って深く死のうではないか。世に類いない死に様の手本となってみせようぞ。

(お初) そういたしましょう。

なんということか、お初を美しく飾るはずの浅黄の小袖にしても抱え帯にしても、死出の道具にするつもりで誂えたのではあるまいに。帯を両方に引っ張って剃刀をあてると、帯は二つにスッと裂ける。

(お初) 帯は裂けても徳様と私の間が裂けることはありません。

二人はその場に腰を下ろして互いの身体をその帯で二重三重に強く結びあった。

(徳兵衛) よく締まったか。

(お初) ええ、しっかりと。

お初と徳兵衛、二人は互いの死に行く姿を見つめ合い、情けないなれの果てよと言葉を交わす。そして声をあげて泣くばかりである。

ああ、泣くまいぞと徳兵衛。顔を上げて合掌する。

(徳兵衛) 私は幼い時に父母と死に別れ、叔父でもある親方の世話になってきた。あれこれ面倒もかけ、やっと一人前になったのに、育ててもらった恩に報いることもなく、そればかりか、死んでからも難儀をかけるとは、言葉に余る不忠者、どうか罪を許してください。冥途におられる父母には、ほどなくお目にもかかることになるから、ぜひお迎えにきていただきたい。

そう言って涙を流す徳兵衛を見て、お初もまた手を合わせる。

(お初) 徳様は羨まじうございます。冥途に行けば親御様に会えるとのお話。それに比べ、初の父様母様は元気でこの世に暮らしておいでのお方。

かかさまはまめでこの世の人なれば、
いつ逢ふことの有るべきぞ。便
はこの春聞いたれども、逢ふた
は去年の初秋の。はつが心中取
沙汰の明日は在所へ聞えなば、
いかばかりかは嘆きをかけん。
親たちへも兄弟へも、これから
この世の暇乞ひ。せめて心が通
じなば、夢にも見えてくれよか
し。なつかしの母様や、名残惜
しの父様やと

しやくり 上げ上げ
声も惜しまず 泣きければ
夫もわっと 叫び入り
流涕焦がるる 心意気
理せめて あはれなれ

いつまで言ふて せんもなし
早や早や殺して 殺してと
最期を急げば 心得たりと
脇差するりと 抜き放し

サア唯今ぞ
南無阿弥陀 南無阿弥陀 と

言へどもさすが この年月
愛し可愛いと 締めて寝し
肌刃が 当てられふかと

眼もくらみ 手も震ひ
弱る心を 引き直し
取り直しても なを震ひ
突くとはすれど 切先は
あなたへ外れ こなたへ逸れ
二三度ひらめく 剣の刃

あつとばかりに 喉笛に
ぐつと通るが 南無阿弥陀 南無阿弥陀
南無阿弥陀仏と くり通し くり通す
腕先も 弱るを見れば 両手を延べ
断末魔の 四苦八苦
あはれと言ふも 余り有り

我とても遅れふか
息は一度に引き取らん と

剃刀取つて 喉に突き立て

この次にお会いできるのはいつのことになるのやら。田舎の便りは、この春に頂いたけど、お目にかかったのは去年の秋のこと。私と徳様の心中は噂になって明日には国許にも届きましよう。そうすると父様や母様はどれほど悲しまれるやら。親たちに対して、兄弟たちに対して、これからお別れをいたします。もしも心が通じるものならば、どうか私の姿を夢にも見てくださいます。ああ、懐かしい母様、名残惜しい父様。

お初がしやくりあげながら大声で泣くので、徳兵衛も堪えきれなくなる。涙も枯れるばかりの悲しみ、その哀れさといえ、訳を問うのも愚かなほどにもっともなことである。

愚痴はいつまで続けていても始まらない、はやく殺してくださいませと、覚悟を決めたお初が最期の時を急ぐと、徳兵衛も承知と答えては脇差をすりと抜き放つ。

(徳兵衛)よいか、お初！
(お初)南無阿弥陀、南無阿弥陀、

そうは言ってもこの年月、愛しいの可愛いと言って抱きしめてきた肌に刃を立てられるはずはない。

目の前はまっくらになり、手も震えて狙いが定まらない。くじけそうになる心を励まして柄を握り直すも、手の震えはいっこうに治まらない。急所を突こうにも切っ先は右へ左へと流れるばかり。二度三度と虚空にむなしく燦めく剣の刃。

その時、一撃がお初の喉笛に当たる。あつと叫ぶも徳兵衛の刃は女の喉に立った。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、口は念仏を唱え続け、手は繰り返して女の喉をえぐる。お初

の腕先より力が消えて、両の手がだらりと広がった。あとに漂うは断末魔の苦しみ、もはや哀れと言うも、言い尽くせるものではない。

遅れはすまい、一息で決めようぞ、とばかり徳兵衛は自らの喉にお初の持っていた剃

つか を は くだ
柄も折れよ刃も砕けと

ゑぐりくりくり 目もくるめき
苦しむ息も 暁の
知死期につれて 絶え果てたり

たれ 誰が告ぐるとは 曾根崎の
もり 森の下風 音に聞こえ取り伝へ
き 貴賤群集の 回向の種
み 未来成仏 疑ひなき
こひ 恋の手本と なりにけり

刀を突き立てた。柄も折れるがよい、刃も砕けてしまえとの勢いで喉をかき切れば、すべては闇へと消えていった。かすかに残っていた苦しみの息づかいも、朝が訪れる頃には知死期に合わせて失せていったのだった。

誰が触れ廻ったのか知らないが、曾根崎は天神の森に吹く風の音のごとく、お初と徳兵衛の悲しき道行きは世に語り広められた。若い命を賭して貫いた恋の道、そんな二人の心は世のあらゆる人々を救いに導いてくれる。この世で報われずとも、未来いずれの世にか成仏できる時が来る、まさに疑いなき恋の手本となったのである。